

ふおーらむ

第16号



目次

巻頭特集

第21回「図書館サポートフォーラム賞」表彰式……………2

挨拶：山崎久道氏

表彰講評：水谷長志氏（代読：松下鈞 表彰委員）

受賞者挨拶

太田浩市氏

川村敬一氏

文集

山内明子「俳句八句」……………12

大村英正「川柳・自由吟（雑吟）」……………13

青木玲子「ベアテ・シロタ・ゴードンさんからの贈り物」……………15

小川千代子「敗戦直後の公文書焼却命令書」……………18

門倉百合子「2019春・東北の旅」……………20

山崎久道「文系？理系？」……………23

水谷長志「継承のためのMLAとその困難

—「モリス・レスモアとふしぎな空とぶ本」と

「ゆずり葉」の詩から思うこと」……………25

編集後記

第21回図書館サポーターフォーラム賞授賞式

於／2019年4月23日(火)

喜山倶楽部光琳の間(日本教育会館内9階)

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

本日は図書館サポーターフォーラム賞の表彰式に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。図書館サポーターフォーラムの代表幹事を仰せつかっております山崎久道と申します。どうぞよろしくお願いたします。

この図書館サポーターフォーラム賞は、本日会場にいらっしやっている初代の代表幹事である末吉哲郎さんが、当会を起ち上げるのと合わせて始められた賞でございます。図書館に関連する賞は様々なものがありますが、この図書館サポーターフォーラム賞は、できるだけ個人を対象に表彰することで出発しました。その時に三つの柱を立てました。毎回話していることで、ご承知の方も多いためですが、大事なポイント

トですので、改めてご説明させていただきます。

第1点は、図書館の専門性と云いましょうか。図書館やそれに類する機関の中で、職員としての専門性を発揮しながら、こつこつと地道に仕事を続けられ、非常に高い成果・業績をあげられた方を表彰しようというものです。

第2点は、図書館の国際化と云いましょうか。とかく日本人は国際的に発表したり、様々なことをアピールするのがどうも苦手なようでした、そういった国際会議の場で提案しても、予想外の反応が返ってきて、票決の場で負けたりする。当然それではダメなわけで、そういった中で国際的な活動や、それに貢献されてきた方を顕彰しようというものです。

第3点は、図書館の社会性と云いましょうか。そういった社会的価値を世間に広く発信されたり、身をもって実践されてきた方を顕彰しようというものです。

よく図書館を社会的共通資本であるとみなす

意見があります。この社会的共通資本というのは、もうお亡くなりになりましたが、ノーベル賞に最も近かった経済学者といわれた、宇沢弘文先生が提唱された概念です。私はこの社会的共通資本という概念を、図書館にあてはめるべきだと、ずっと思っていました。どういうことかということ、図書館は社会の役に立って、そして皆の生活を豊かにするために存在している。しかも公共の利益のために存在する。ですからそこで働く専門家によって運営されなければならぬし、利益を単一目的にしてはいけないといわれるわけです。そういう意味で、図書館は非常に社会的存在であるわけです。

また図書館というのは、人間の何世紀にもわたる知恵が、延々と築かれてきた宝庫でございます。しかもそれがきちつと整理をされていることが、インターネット上の情報資源との大きな違いです。もちろんインターネット上の情報資源は非常に価値がありますが、図書館は図書館で、きちつと情報や資料があらかじめふるいにかけられ、整理されているという価値は非常に大きいですし、私たちはそのことにもっと自信をもつべきだろうと思います。

こういった専門性、国際性、社会性といった三つの観点を柱にして、表彰活動を行っております。

この後、水谷表彰委員長が校務欠席のため、

代理として松下表彰委員からお話をされると

思います。表彰選考の結果、今回も素晴らしいお二方の表彰者をお迎えすることができました。お二方ともこの三つの柱のうち、二つぐらいいには必ず適合する、文句のつけようのない評価を得て、表彰することとなりました。この会は大変さやかな会ではございますが、これを起爆剤として、日本の図書館界のみならず、社会全体における図書館の位置づけが少しでも高められるように、活動を続けていけたらと思います。今後とも、皆様に様々な形でご協力を願えれば幸いです。

以上をもちまして、表彰式のご挨拶とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

2. 表彰講評

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

図書館サポートフォーラムの表彰委員長をしております跡見学園女子大学の水谷と申します。よろしくお願いいたします。

早速ですが、第21回図書館サポートフォーラム賞の表彰結果について、ご報告いたします。

今回は、図書館サポートフォーラムの会員および事務局より、個人2名の表彰候補が推薦されました。

この数は昨年以前から比べますと、きわめて少ないのでありますが、これが図書館界の現状と何かしら関係があるのか、即断することは適当ではありません。もう少し、たまたまの事態として受け入れ、推薦候補が本図書館サポートフォーラム賞に真にふさわしいのかのみを厳正に審査いたしました。

審査は3月11日、大森の日外アソシエーツにおいて10名の出席幹事による投票および3名の不在幹事の通信投票によることとなりました。

出席・不在のあわせて13名の幹事による投票が行われました。その結果は、すなわち、この度の第21回図書館サポートフォーラム賞は、推薦

の個人2件、いずれも図書館サポートフォーラム賞にふさわしいご業績としてお二人様が受賞されることになりました。

では、五十音の順に第21回図書館サポートフォーラム賞の表彰理由について述べさせていただきます。

まず、最初に個人表彰として太田浩市様の表彰理由を読み上げます。

○太田浩市様 (八王子市中央図書館館長)

太田浩市氏は平成16年に八王子市が策定した「八王子市生涯読書活動推進計画」に図書館職員として深く関与され、また平成29年度には八王子市中央図書館長として、特に高齢者の図書館利用、ひいては生き甲斐の向上と高齢者自らの研究活動意欲の高まりを強く支援されました。その意図をもって、さらに八王子の郷土の誇りである「千人同心」にちなむ「八王子千人塾」の開設にも注力されたことは、生涯学習や地域振興の拠点としての公共図書館の使命と進むべき姿をあざやかに示す活動であり、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

現在の公共図書館はともすれば高齢者のリトリート、隠居所。隠れ家。避難所。に見えがちですが、それを、「八王子千人塾」をもって見

事に裏切り、括目すべき地域振興拠点に書き換えた手腕には、今後の公共図書館の望ましい方向を示していただいたように思われてなりません。その裏では多くの時間の傾注とご努力があったかと思われませんが、これから、第二、第三の千人塾が誕生する日も近いのではないのでしょうか。

次いで、同じく個人表彰の川村敬一様の表彰理由を読み上げます。

○川村敬一様（元・獨協医科大学図書館

／同越谷病院図書室）

川村敬一氏は永く医学図書館員として業務を遂行されつつ、「分類」および「索引」という知識情報の組織化に必須の課題に取り組み、多くの関連専門誌に論考を発表されて、その知見を紹介されるだけでなく、当該領域の研究意義の理解促進に貢献された。また、ユネスコと国際情報ドキュメンテーション連盟が共同開発した変換言語BSO (Broad System of Ordering: 広範配列体系) の事業に一九九五年から編集顧問として参与し、二〇一一年にはBSOに関する英文書誌をアリゾナ大学から刊行された。内外における同氏の業績は、まさに図書館サポーターフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

私にとっての川村様のご著作『サブジェクト・インディケーション』（日外アソシエーツ、1988）は、トライしてもトライしても通読のできなかった大きな壁でした。さらにBSOへ進まれたご研究の全貌を把握することは、私には、到底できませんが、そのお仕事、特に国際的文脈で編まれたBSO—Broad System of Ordering: An International Bibliography. University of Arizona, 2011. の刊行の意義においては、深い尊敬の念を抱くものであります。資料によれば、川村様の図書館短期大学の別科特別研究の修了論文は、故小野泰博先生のご指導のもと、「ガブリエル・ノーデ年代記—17世紀フランスにおける司書兼秘書の生涯と学術通信網の形成」であったとのことでした、ノーデとBSOをつなぐ糸、個人的変遷史について、是非、回顧的一文を草していただきたいと願うものであります。

第21回を迎える図書館サポーターフォーラム賞も、この賞の三つの柱にかなって、長年の研鑽と国際性、そして図書館のあることの意義の発露顕現をよく示すお二方に受賞いただきました。今回、例年になく推薦件数は少なかつたのではありますが、まことに力の入ったお二人のご業績において受賞者を得ましたこと、表彰委

員長として、ことのほか嬉しく思っております。

以上をもちまして、簡単ではございますが、今回の図書館サポーターフォーラム賞の表彰者のご紹介とさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。ありがとうございました。

3. 受賞者挨拶

太田浩市氏（八王子市中央図書館館長）

この度、名譽ある「第21回図書館サポートフォーラム賞」をいただいたことに、厚く御礼を申し上げます。本日は、どうしても外せない公務のため受賞式に参加することができず、大変申し訳なく残念に思いますが、このメッセージをもちまして皆様への感謝の気持ちを少しでもお伝えできればと願っております。

改めまして、今回受賞のきっかけとなりました八王子市図書館の「八王子千人塾」について、もう16年前となりますが、発足当時のお話をさせていただきます。



平成16年3月に、八王子市図書館では、子どもだけでなく、「いつでも、どこでも、だれでも」が読書に親しめる環境整備を図るため、「読書のまち八王子推進計画」を策定し様々な取組を進めることになりました。この計画には、高齢者へのサービス充実が明記され、具体的には、生涯学習のための「調べ学習会」や「読書会」などのサービスの提供を行うこととされていきました。とはいえ、特に生涯学習は当時前例もなく、また、図書館の内部事務も開館時間の延長もあつて人手が足りず、職場内では事業の具体化は困難と言われていました。

そんな時、『クックとタマ次郎の情報大航海術―図書館からはじめる総合学習・調べ学習』という図書を偶然見つけました。この本は、主に小学生が総合学習に役立てることを想定した本でしたが、調べ学習に役立つアイデアがたくさん詰め込まれたものでした。また、著者である片岡先生自身も教壇で生徒たちに実践指導をされており、私は藁にもすがる思いで著者である片岡剛夫氏に連絡をとり、お会いする機会をいただきました。この時、先生よりご紹介いただいたのが、講師をされている神奈川県座間市立東地区文化センターで開催されていた「あすなる大学」という高齢者向けの生涯学習講座が、私が事業化しようと思っているものに近く、参

考になるのではないかとのことでした。

後日、事業化に向けて具体的なモデルを見ることができると期待に胸を膨らませて伺ったところ、その活動は私のイメージを遥かに超えるものでした。約40名の高齢の男女が、調べた結果をパワーポイントや模造紙にまとめ、発表や活発な質疑がなされるなど、とてもいきいきと楽しそうに活動されていたのです。

早速、参加の動機やあすなる大学の良い点、また、運営のポイントなどを参加者に伺ったところ、その中で最も多く出されたキーワードが「仲間」でした。これは「一朝一夕にできたものではなく、講座のカリキュラムの中で交流が生まれ、仲間ができ、その仲間がいるからこそ今の活動につながっている。そう簡単にできるものではないよ」とおっしゃる方もおり、講座のノウハウさえあれば実現できると思っていた私は、暗澹たる思いで帰途についていることを覚えています。

図書館には、膨大な資料、会議室があります。個人の利用を前提として、利用者同士を結びつける機能を持ち合わせていませんでした。さらに、「調べ学習」という言葉も一般的にあまり馴染みがなく、「調べ学習講座」の設立のためには、どこから手をつけてよいのかわからなくなり途方に暮れてしまいました。

そんな時、別件で八王子市の高齢者ボランティア団体の会長をなさっていた方にお会いする機会を得ました。何かヒントをいただけるのではないかと、思い切って高齢者向けに調べ学習講座の開催を検討していることを相談してみました。

すると、「最近の図書館は、貸出ばかりでレファレンスが軽視されているように感じるね。調べ学習講座はその点でも良いサービスなので、私も協力するよ。レファレンスは、一般人には馴染みがないものだし、図書館の講座といってもあまり理解されないだろう。でも、これはとてもいいことだから、時間はかかると思うけどやってみるといいよ」とおっしゃってくださいました。

その後、この方他、窓口で熱心にレファレンスサービスを受けている方にも参加を呼びかけました。中には怪訝そうに立ち去る方もいましたが、調べたことがアウトプットできるという点がフックになり、7名の参加者に集まっていたことができました。

参加者の皆さんの経歴は、証券会社の元支店長、某製作所の元エンジニア、某名門都立高校の元国語教師、不動産会社の元営業マン、大手化粧品メーカーの元部長など、多彩で自己紹介をお聞きしているだけでも興味深い話も多く、参加者を互いに刺激し、自然に会話と交流が生

まれたように思います。また、マンパワー不足の図書館にとって、千人塾のカリキュラムを終了した後、「あすなる大学」のように自主運営組織として自立させるには、運営側に回ること

に批判的な方もいらして、人間関係がギクシャクして苦勞が多かったように思います。とはいえ、この方々たちは、組織運営に関する経験も豊かで、裏で様々なアドバイスをして下さり、そのおかげで無事、千人塾塾生の会を設立することができたのです。設立後まもなく、私は人事異動により、千人塾の運営に携わることとはなくなりましたが、10年以上が経過して再び館長として図書館に戻り、千人塾および塾生の会が活発に活動を続けていることに大変感銘を受け、心から嬉しく思っております。

本日会場にお見えの、塾生の会代表・大沼一夫様をはじめ、塾生の会会員の皆様はもちろん、立ち上げの際に多大なるご協力をいただきました片岡先生をはじめ、座間市のあすなる大学の皆様、また担当業務を引き継いでくれた後任の職員達、そして、この取り組みを評価し、また応援してくださった図書館サポートフォーラムの皆様、心より感謝申し上げます。そして、人生100年時代において「図書館でどう学び続けるか」という問いへの1つのロールモデルが今後ますます広がりを見せていくことを願

いまして、ご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

川村敬一氏

(元・獨協医科大学図書館・

同越谷病院図書室)

このたびは立派な賞をいただきまして推薦者ならびにフォーラム関係者各位に厚く衷心より御礼を申し上げます。私の受賞理由は分類および索引、すなわち索引言語の研究意義に対するものと理解しております。本日は私にとって根幹をなす三つのシステムと、影響を受けた一人の人物について、簡単に述べてみます。



私は1976年に28歳で新設間もない医科大学の図書館で専門職としての一歩を踏み出しました。ご存知のように科学技術系図書館の蔵書の中心は内外の雑誌です。個々の雑誌記事を探すためのツールである2次資料(抄録誌・索引誌・目次速報誌など)の整備も同じく重要です。しかも医学図書館の場合は、薬学、化学、生物学など周辺分野の2次資料の整備も必要です。

私は2次資料の使い方を学ぶ過程で、それぞれの索引法に興味をもちました。そして4年がすぎた1980年から、3年連続でJICSTの『情報管理』誌に、KWIC、ASI、NEPHISに関する論考を発表しました。2作目が出た年、英米加豪の索引家協会(The Society of Indexers)の講習会テキストが、藤野幸雄訳『索引—作成の理論と実際』(日外アソシエーツ、1981)として出版されました。本書の序論で、編者である初代会長のノーマン・ナイト(G. Norman Knight)は、索引の傑作を五つあげ、それらを徹底的に研究し、その原理に注目するように説いております。五つのうち三つは作家の日記に対する索引で、残り二つが米国のChemical Abstracts (CA)の索引とローツ(E.J. Coates)のBritish Technology Index (BTI)だとしております。このうちCAの抄録を一般主題から探すGeneral Subject Indexこそ、私が2作目で論じたASI (Articulated Subject

Index:前置詞分節索引)に他なりません。

CAの主題索引の機械化は、1960年代後半に英国シェフィールド大学大学院図書館情報学科教授で化学者のリンチ (Michael Felix Lynch)のチームが成功し、彼らはこれをASIと名付けました。直訳すると分節主題索引ですが、これでは他のシステムと区別がつかみません。分節された索引語の前か後に、必ず前置詞などの機能語がつくので、Articulated Prepositional Indexと呼ぶ人がおります。私はASIの入力ストリング(タイトル形式の記述句)と索引記入(複数)の間に統語規則を介した相関関係が存在することを突き止めました。そして利用者は一主題に対して作成される複数の索引記入のどれからも、入力ストリングを復元できることを明らかにしました。これが本邦最初の指摘だとして、化学・薬学文献情報学の先達からお褒めの言葉をいただき、勇気づけられました(笹本光雄「二つの“L” - Chemical Abstractsの索引の構成とオンライン・システムにおける発展」『色材協会誌』57(3)1984)。二つの“L”とはKWICを考案したIBMのルーン(Hans Peter Luhn)とASIのリンチのことです。

続いて英国図書館協会(LA)が1962年に創刊したBTIについて調査しました。初代編集長のローツが索引システムの考案者で

もあり、その原理が2年前の著書 (Subject catalogues: headings and structure. London, LA, 1960) で展開されつつ、しかも彼が主題

索引の天才 (the genius of subject indexing) の異名をとっておりました。彼はまた1952年設立の英国分類研究グループ (CRG) の創立会員の一人でした。私が最も衝撃をうけたのは、BTI索引法が分類の原理に基づくことでした。しかし、よくよく考えてみますと、外見は別物に思える分類と索引(件名)ですが、主題を表すという点では同類です。両方を根底の概念レベルであつかうところに、コーツの非凡な才能が見て取れます。そして分類においては、概念と記号の間に一対一の対応関係が保たれていることから、この特徴を最大限に生かす主題組織法を追求しております。このような考え方をコーツは主題表示の同一性 (the unity of subject indication) と呼び、ランガナータンの中に見出したことを告白しております。私は1984年1月にコーツに手紙を書き、直接の教えを請い、4年後の初夏に最初の著書『サブジェクト・インデケーション―主題表示におけるエリック・コーツの寄与』(日外アソシエーツ, 1988) を上梓しました。本書はコーツの件名標目理論とBTIの他に、後述のBSOをくわ

えた三部構成であったことから、その年の晩夏にヘルシンキで開催された国際情報ドキュメン

テーション連盟 (FID) の第44回大会で展示されました。

ASI, BTI, そして1970年代〜80年代に時の寵児となったPRECISが、英国の三大機械化索引システムです。開発の順序はASI - BTI - PRECISでしたが、構造上はASI - PRECIS - BTIの図式になります。PRECISは最初は両方のいいところ取りで迎えられました

が、最後は手の込んだコスト高のどっち付かずとして見放された感があります。1970年代にカナダで開発されたNEPHISは、PRECISの代役を目指しておりましたが、実験の域を出ませんでした。結論として、ASIとBTIが対極に立つのですが、両雄に傑作の折り紙をつけたノーマン・ナイトの慧眼は敬服に値します。

コーツは1977年にFID/BSO Panelの委員長に任命され、BTIを退けております。BSO (Broad System of Ordering: 広範配列体系) とは、国連科学技術情報システム (UNISIST) の構想における異なる索引言語間の変換言語として、ユネスコの資金供与のもと、FIDを舞台に1973年〜78年に開発されました。コーツは半年遅れで10番目の委員として末席に名を連ねましたが、彼の働きによってBSOは完成にこぎつけました。BSOという名称は、新しい配列体系すなわち分類法として、それが開発の途中で知識の全分野に範囲を拡大したことに

由来します。しかし、ユネスコもFIDも財政難に苦しみ、後者は2002年に消滅しました。その前の1991年にBSOはFIDから切り離され、縮小した委員会は英国で法人化され、2000年からはCRGの拠点であるロンドン大学の管理下にあります。

BSOは現代の世界観を反映した新しい一般分類法です(拙論「一般分類法における主類の選定と順序―その哲学のおよび社会歴史的背景の考察」『日本図書館情報学会誌』50(1)2004)。私は1991年からBSOの改訂作業に関わり、1995年に英国BSO委員会の編集顧問 (Editorial Consultant) に任命されました(回覧中のBSO委員会の公式便箋をご覧ください)。その経験から『BSO - Broad System of Ordering: an international bibliography』(University of Arizona Campus Repository, 2011) を編纂し、これを踏まえて定年退職の前年に博士論文『BSO,あるいはCRGの新しい一般分類表―仮説と論証』(大阪市立大学, 2013年3月)で、構造上の特性と文献の根拠を示し、本当の起源を明らかにしました。さらにBTIが1981年に誌名変更されていることから、『Bibliography of the British Technology Index』(樹村房, 2015) を編纂し、「ランガナータンの遺産―英国技術索引における分類の諸原理」『日本図書館情報学会誌』(63(1)2017) を著

わして、後学の道案内としました。上述BSOとBCIの英文書誌では、すべての項目に英文抄録がつき、それらが分類順に配列されております。利用者は文献調査のためのツールとしてだけでなく、目次(分類表)を見て概略をつかんだら、本文を物語としても通読できます。

コーツは2017年12月5日に101歳で他界しました。同月、長男ポールからの訃報に続き、国際知識組織化学会(ISKO)から私に追悼文を書くように要請があり、翌年3月刊行の機関誌『Knowledge Organization』(45(2)2018)に、追悼文と業績目録(分類順)が掲載されました。続いてロンドン大学教授でCRG幹事のブロートン(Vanda Broughton)から誘いがあり、彼女とポールと私の共著でCLIP(かつてのIA)の機関誌『Information Professional』(June 2018)に追悼文を寄せました。これと前後して2018年6月にはISKOの新企画である電子百科事典『SKO Encyclopedia of Knowledge Organization』の編集長から、コーツの評伝を執筆するように要請があり、引用文献を含む業績目録(年代順)を付した論文様の記事が、同年9月4日に掲載されました(オンライン閲覧可)。これらの記事のタイトルにはすべてコーツの名前(Eric Coates)が含まれております。

医学図書館員として現場一筋の私ではありま

したが、索引言語の構造に興味を抱いたおかげで、他の分野の文献にも抵抗なく接することができ、視野を広げることができました。これに伴い人との輪も広がりました。そして主題表示の同一性という、ランガナータン由来の思想との出会いにより、自分の中に確固とした視点をもつことができ、物事を見る目が養われました。これらの幸運には感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、今後の課題について申し上げます。関西の劇作家で評論家の山崎正和氏は、「現代の電子情報が個人自身の検索した知識しか与えず、結果として個人の興味の範囲を狭くしている」(『ビブリオバトル』『読書新聞』2016年9月5日朝刊)と述べております。本サポーターフォーラムの代表幹事である山崎久道氏は、「Googleによる検索が大衆化しても、むしろ検索行為そのものの質は低下している」(『情報貧国ニッポン』を超えて)『TP&Dフォーラムシリーズ』(26)2017)と述べております。識者の警鐘をよそに、情報技術の発達に目を奪われ、多くの人は事の重大さに気づかずにおります。問題を図書館の視点でとらえるなら、検索を単なる言葉の操作(実はそれは記号の操作なのですが)から、知識の組織化に根ざした概念の操作に戻す必要があります。関連語(RT)の問題には改めて取り組む必要があります。そして

操作の具体的ツールである索引言語、特に知識の全分野を網羅する新しい一般分類法が、検索の段階で果たす役割を追求してみる必要があります。私自身、この線に沿った研究をもう少し続けて参りたいと願っておりますので、これまでもどおり皆様のお力添えを賜ることができれば幸甚に存じます。本日はありがとうございました。

- 1962-1976 Editor, *British Technology Index*
 1977-1990 Rapporteur, FID/BSO Panel (BSO Switching Test 1981 & BSO Referral Test 1982/83)
 1991-1992 Rapporteur, BSO Panel
 1993-2000 Director, BSO Panel Ltd, UK
17. Coates, E.J., J.E. Linford, G.A. Lloyd and S. Maricic. *BSO - Broad System of Ordering*. 4th revision. Machine-readable version. St. Albans, UK, BSO Panel Ltd, 1991. Updated in 1994. Since 2000 an updated version of the 4th revision has been made available in the website of University College London: <http://www.ucl.ac.uk/fatks/bso> → Editorial Consultant, BSO Panel, Ltd, UK, 1995.
 18. Kawamura, Keiichi. *BSO - Broad System of Ordering: an international bibliography*. Tucson, University of Arizona Campus Repository, 2011, 102p. <http://hdl.handle.net/10150/129413>
 19. 川村敬一「BSO, あるいはCRGの新一般分類表 — 仮説と論証」博士論文, 大阪市立大学, 2013.03. 縮約版: 大阪市大学術情報総合センター電子紀要『情報学=Journal of Informatics』10(2)2013, p.1-10.
 20. Kawamura, Keiichi. *Bibliography of the British Technology Index*. Tokyo, Jusonbo, 2015, 123p.
 21. 川村敬一「ランガナータンの遺産 — 英国技術索引における分類の諸原理」『日本図書館情報学会誌』63(1)2017, p.20-36.
 22. なぜ新しい一般分類表が必要なのか? → 前掲8の(3).
 23. 語彙統制の基盤 → 同義語のチェック: BTIはUDCを利用
同義語の定義: 同義語とは分類表において同じ箇所に置かれる語(コーツ)
 24. 定義法: 内包(intension)と外延(extension) 関連語(RT)の定義: シソーラスも件名標目表も・・・
 25. "Improvement in this reference structure probably awaits further fundamental work in library classification." Coates, E.J. "Aims and methods of British Technology Index". *The Indexer*, 3(4)1963, p.146-152.
 26. パラダイム・シフト(前提変化): 整理技術者の人口減と検索の大衆化
 27. 山崎正和「ビブリオバトル」『読書新聞』2016年9月5日(月)朝刊, p.1-2.(地球を読む).
現代の電子情報は個人自身の検索した知識しか与えず, 結果として個人の興味の範囲を狭くしている。
 28. 山崎久道: 今の社会は, 情報の生産量は爆発的に増えるのに, その消費量は遅々として伸びず, Googleによる検索が大衆化しても, むしろ検索行為そのものの質は低下している(TP&Dフォーラム2016)。
 29. Mills, Jack (1997). 図書館員の仕事 (J.H. Shera): Bibliography & retrieval → Locating & relating.
 30. Coates, E.J. (1960). "All forms of subject catalogue have a two-fold objective." 前掲6の(3), p.19.
 31. 川村敬一「一般分類法における主類の選定と順序—その哲学および社会歴史的背景の考察」『日本図書館情報学会誌』50(1):2004, p.1-25. BSO: 統合レベルの理論 (the theory of integrative levels)
 32. Kawamura, Keiichi. "Ranganathan and after: Coates' practice and theory. *Knowledge organization and the global information society: Proceedings of the 8th International ISKO Conference, 13-16 July 2004, London, UK*. Ia C. McIlwaine, ed. Bärzberg, Ergon Verlag, 2004, p.337-343.
 33. Kawamura, Keiichi. "In Memoriam: Eric Coates, 1916-2017." *Knowledge Organization*, 45(2)2018, p.97-102.
 34. Kawamura, Keiichi. "Bibliography of published works by Eric James Coates." *Knowledge Organization*, 45(2)2018, p.103-107.
 35. Broughton, Vanda, Paul Coates and Keiichi Kawamura. "Eric Coates." *Information Professional*, June 2018, p.54. CILIP (Chartered Institute of Library and Information Professionals, 2002).
 36. Kawamura, Keiichi. "Eric Coates." *ISKO Encyclopedia of Knowledge Organization (IEKO)*. 4th September 2018. www.isko.org/cyclo/coates ISKO 電子百科事典>人物伝>コーツ

第21回図書館サポートフォーラム賞 表彰式 2019年4月23日(火) 日本教育会館
川村敬一配布資料

- 川村敬一「KWIC 索引の問題点と改良の試みに関する展望」『情報管理』23(7)1980, p.571-589.
- 川村敬一「Articulated Subject Index の構造的特性と機械化プログラム」『情報管理』24(5)1981, p.447-456. Michael Felix Lynch (1932-2018), University of Sheffield, UK. 前置詞分節索引.
- 笹本光雄「二つの”L” — Chemical Abstracts の索引の構成とオンライン・システムにおける発展」『色材協会誌』57(3)1984, p.148-154. 日本薬学会年会文献情報管理部会特別講演, 1983.4.6.
- 『索引—作成の理論と実際』日本索引家協会監修, 藤野幸雄訳, 日外アソシエーツ, 1981. (原書名: *Training in indexing: a course of the Society of Indexers*. G. Norman Knight, ed. Cambridge, MA: MIT Press, 1969). 索引の傑作: Chemical Abstracts の索引; コーツの British Technology Index.
- Chemical Abstracts. Chemical Substance Index + General Subject Index*
Calcium
metabolism of, by bones, after administration of cortisone and its analogs, duraborin protection against, in bone disorders, 60:16173b
Durabolin protection against metabolism of calcium by bones after administration of cortisone and its analogs in bone disorders, 60:16173b
- British Technology Index (BTI)*. London, Library Association, 1962-79.
 - 米国に片割れ (Applied Science and Technology Index, NY, H.W. Wilson), 英国で二度失敗
 - 初代編集長が考案者で主題索引法の天才 (the genius of subject indexing) の異名をとる
 - Coates, E.J. Subject catalogues: headings and structure. London, Library Association, 1960.
 - 1952 年設立の CRG (Classification Research Group) の創立会員の一人
- BRIDGES, Box girder., Cable stayed; Steel : Moving : Bearing; Sliding; P.T.F.E.
(橋, 箱桁, . 斜張; 鋼鉄製: 移動: ベアリング, 滑走: 四フツ化エチレン樹脂=テフロン)
密着度 コンマ (,) > セミコロン (;) > コロン (:)
BRIDGES
BRIDGES, Arch (類種関係 or 包含関係) A > A + B
BRIDGES : Beams : Strength (統語関係+統語関係)
BRIDGES, Cable stayed (類種関係 or 包含関係)
BRIDGES; Concrete : Shrinkage (類種関係+統語関係)
- 原理: (1) The basic unity of subject indication (主題表示の同一性: 概念, 用語, 記号レベル)
(2) Relational analysis in the context of classification (分類の文脈で関係分析)
(3) Recourse to classification in any case (分類を頼みの綱とする)
- 英国の三大機械化索引システム
年代順 ASI - BTI - PRECIS (1970 年代に英・加・豪の全国書誌が採用・・・現在は LCSH)
構造上 ASI - PRECIS - BTI
両極端 ASI—————BTI (上記4と5と7を参照)
- 川村敬一『サブジェクト・インディケーション—主題表示におけるエリック・コーツの寄与』日外アソシエーツ, 1988.06. [1: 件名標目理論の展開, 2: British Technology Index, 3: Broad System of Ordering]. 展示: The 44th FID Congress held in Helsinki, Finland, 28 August to 1 September 1988.
- BSO - Broad System of Ordering: Schedule and Index*. 3rd revision. Prepared by the FID/BSO Panel (Eric Coates, Geoffrey Lloyd and Dusan Simandl). The Hague, FID : Paris, UNESCO, 1978.
- The BSO Manual: the development, rationale and use of the Broad System of Ordering*. Prepared by the FID/BSO Panel (Eric Coates, Geoffrey Lloyd and Dusan Simandl). The Hague, FID, 1979.
- Switching language for UNISIST (United Nations Information System in Science and Technology) program. 1973-78. 10 members: 4 from FID/CCC (Central Classification Committee); 4 from FID/CR (Committee on Classification Research); and 2 co-opted, Ingetraut Dahlberg & Eric Coates.
- なぜ末席のコーツが FID/BSO Panel の委員長になったのか? なぜ BSO が英国に引き取られたのか?
- Coates, E.J. “CRG proposals for a new general classification.” *Some problems of a general classification scheme: Report of a conference held in London, June 1963*. London, Library Association, 1964, p.38-45. CRG’ s research project for a new general classification, 1963-68, funded by NATO. ← NATO report: *Increasing the Effectiveness of Western Science* (1960).
- Eric James Coates (1916-2017) の経歴
1934-1949 Junior Assistant, Cataloguer, Public libraries
1950-1961 Chief Subject Cataloguer, BNB

俳句八句

山内 明子

千匹の鮭襖なり尾から吊し

父の好み二級爛酒われもまた

貝焼やフランス語めく津軽弁

肉ばっか食うんじゃねえと栄螺売り

諸子焼く京の町家の土間長き

へえ私にまだ恋心夏夕べ

ビール来るビアジョッキを掲ぐれば

ビアジョッキ受取り飲むや卓に置かず

川柳・自由吟（雑吟）

大村 英正

一、真つ黒を真つ白にする民主主義

この句は第十三回全国時事川柳大賞 誌上大
会（二〇一八年の出来事）入選作。

二、あっぱれとやり過ぎ交じる特捜部

三、月の裏よりも知りたい口の裏

四、役所では貉が狸を検証し

五、三月まで生徒のはずがオープン戦

この四句は二〇一八年十二月から二〇一九年

三月、朝日新聞「朝日川柳」欄に掲載された拙
句である。

六、年金に欲しい集団自衛権

七、減っていき無くなる心配、髪年金

八、集客と避難計画温泉地

九、お笑いと二足のワラジもまたよしと

十、半年後皆忘れると愚民観

十一、科学一、経済二流、政治三

十二、留守中にドローンで届く押し売り品

十三、肅々と言わず肅々辺野古基地

十四、衛生とジェットで空に足がかり

十五、五郎丸ポーズも効かぬプロポーズ

十六、願いごと妻には言えぬ初詣

十七、育休を申請不倫を疑われ

十八、徘徊に大岡裁き温かく

十九、見ておれよ十八歳がもの申す

二十、やせ我慢風鈴打ち水蚊帳裸

二十一、手八丁足八丁の銀リレー

二十二、頼みたい野党再建ゴーン様

二十三、腹六部酒と薬が二分と二分

二十四、詳しくはホームページに腹が立つ

二十五、大吉が出るまでハシゴ初詣

この二十句は二〇一五年六月から二〇一七年

一月、朝日新聞「千葉笑い」欄に掲載された拙
句である。

二十六、子は塾へ妻は夜遊び俺夜勤

二十七、歓迎会その気になれば送別会

二十八、一芸を生かしなさいと都落ち

二十九、知恵を出せやらされぬなら出してやる

三十、戦争へ行かない人の戦争論

三十一、妻と母口より目です説得力

三十二、責任は神話に取らず再稼働

三十三、合意せぬことでT P P 合意

（合意せぬことで合意のT P P）

三十四、解説は五番も先の照の富士

三十五、最大級それでも足りず想定外

三十六、自分史は妻さえ読まぬ自慢集

三十七、朝まらのお久し振りで覚める喜寿

三十八、買ったのよおまけ欲しさに無駄なもの

三十九、OB会自分が一番若く見え

四十、諍いの断えぬ夫婦に子が四人

四十一、パソコンに葉たずねる若い医者

四十二、何故なのか謝って乗るワンメーター

四十三、庭先で野菜作れとT P P

四十四、散歩です徘徊じゃない保護するな

四十五、昨日俺休むも妻は気づかない

四十六、人が出て熊がびっくりする時代

四十七、報復の次の手見えぬ十字軍

四十八、アーンして！自分が食べる卒寿妻

四十九、定年でマイエプロンを貰うはめ

五十、日本語の乱れ此の頃ハンパナイ

五十一. 最低の下もあります賃金制
五十二. 半世紀ですが不可解夫婦仲

五十三. 呼んだことないが妻の名忘れない

五十四. 花が散り葉が落ち枝に古稀の棘

五十五. 補聴器の調子次第の地獄耳

五十六. G8名案の出た記憶なし

(名案の出た記憶ない(G8))

五十七. 初孫に名前で呼ばせ若返り

五十八. 爺に似たところを探す孫の顔

五十九. 影踏まず昔先生今は妻

六十. 喜寿を過ぎシワと貯金が反比例

六十一. ラブラブがデブデブになり銀婚式

六十二. 交渉は舞台裏より水面下

六十三. 風邪なのに介護の資料くれる子等

六十四. ボケじゃない沈黙考明日の夢

六十五. 黒い腹までは見えない内視鏡

六十六. 現代っ子よりも優しい介護ロボ

六十七. あの世でも未だ喰うつもり歯科通い

六十八. 打開策知ったかぶり知らん顔

六十九. 肩書が取れて治った五十肩

七十. 近い内女房子供保有税

七十一. この猛暑無料サウナと前向きに

七十二. あちら過去こちら未来の日中韓

七十三. 四季通し俺のサイフはクールビズ

かつメッセ」に入選作として掲載された拙句である。

この四十八句は二〇一五年十月から二〇一六年九月東葛川柳会機関誌「ぬかる道」の「とう

ベアテ・シロタ・ゴードンさんからの贈り物

青木 玲子

アーカイブの仕事をしていると、思いもかけない人や史資料との出会いがあるとつくづく思う今日この頃です。図書館との関わりが突然に見えてきました。

今年の5月に、中島京子著『夢見る帝国図書館』（文藝春秋社）が出版されました。私は、書店の新刊コーナーで初めて手に取り、えっ？ 帝国図書館？ 図書館史？ 中島京子？ 小説？ ノンフィクション？ と思いが巡りました。「夢見る」と言う言葉にも惹かれて、とにかくすぐ買い求めて、帰りの電車で読み始めました。書き出しで、中島京子が小説家であることを思い出し、帝国図書館の歴史や図書館のエピソードも絡めての物語だとわかりました。少し読み進めると、樋口一葉が図書館に通った話が出てきました。実は、私も数年前から、明治期の図書館を女性がどのように利用したのか調べていて、樋口一葉と帝国図書館の関わりも知っていました。菊坂の一葉の旧居から、東大の弥

生門を通って暗闇坂を通り、芸大の敷地の旧図書館まで歩いてみたこともあります。時には、男性利用者に冷やかされ、受付では、ぞんざいに扱われても、なお古典籍を読みたくて、この道を一葉が通ったと思うと、暗闇坂あたりでその必死の思いに胸が詰まりました。私も帝国図書館に夢見ていたのかもしれない。

帝国図書館を調査するうちに、婦人閲覧室があり、男女別席で樋口一葉だけでなく、宮本百合子も利用していたことがわかりました。もう少しで物語が終わりかと一息ついた時に、もう一度えっ!!とびっくりしたのは、最後の方の章「夢見る帝国図書館・24 ピアニストの娘、帝国図書館にあらわる」の下りでした。ピアニストはレオ・シロタ、娘は、ベアテ・シロタ・ゴードンです。まさか、この物語にベアテさん（親しみを込めてこう呼んでいる）が「あらわれる」とは思ってもいませんでした。実は、数日前に、ベアテさんのアーカイブの要件で Mills

College を訪問して帰ってきたばかりでした。ベアテさんは、2012年12月30日に89歳で亡くなっていますが、彼女は、自分のアーカイブをサンフランシスコ・オークランドにある卒業した Mills College に寄贈することを遺言として残していました。多くの日本の女性団体の方や、ご遺族の方の支援があり、国立女性教育会館 (NVEC) 女性アーカイブセンターは、ベアテさんの日本での活動記録、日本語の憲法関連資料などアーカイブの一部寄贈を受けることになり、この2年間、準備を進めてきました。ベアテさんのアーカイブは、Mills College と NVEC で協同保存することになります。

ウィーンで生まれ、5歳でピアニストの父親が東京音楽学校教授に招聘されたのと合わせて両親とともに来日し、少女時代を日本で過ごし、アメリカの大学で学んだベアテさんのその後の多様な一生をここで多くを語る事ができませんが、「夢見る帝国図書館・24」の章に書かれているのは、戦後ベアテさんがアメリカの G H Q の一員として1945年に帰国し、日本国憲法草案の作成に関わった時の話です。

ベアテさんは、日本の女性が明治憲法のもとで社会的にも家庭的にもその地位が平等でないことを知っていました。日本国憲法、第14条「法の下の平等」、第24条「両性の平等の原則」の条文の草案を作成しました。密室でたった一人

の女性として憲法草案策定の作業を始めた時、彼女は参考資料として各国の憲法に関する本を借りるために、当時の都内の図書館をジープで回ったと伝記にも記してあります。なるべく憲法を書いていることを疑われないように、大学や図書館を5館ぐらいに分けて少しずつ借りたそうで、東京大学と日比谷図書館の名前は出していますが、あとは覚えていないと質問にも応えています。しかし、その当時、各国憲法を所蔵しているところはそんなになかったでしょうから、帝国図書館には行ったのではないかと思います。帝国図書館でのどなたかの証言は残っているのでしょうか。貸し出した図書館と資料を調べてみたいものです。

ベアテさんは、大学を卒業してから、ニューヨークの「タイム」誌の外国部でリサーチャーとして働いていましたので、当然図書館は利用していて、その経験が生きたのではないでしょう。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スカンジナビア諸国の憲法をあげており、彼女は語学の才能があつて、日本語はもちろん、六か国語が話せたとのことでしたので、借りた各国憲法をもちろん参考にしていることと思われる。また多くの民生局員がベアテさんの借りた各国憲法を参考にしたり、民間草案を起草した「憲法研究会」のメンバーも帝国図書館に通っていたこともあり、作家は「それは帝国図書館

にとつて、最後にして最大の仕事だったかもしれない」とこの章を締めくくっています。その後、日本の憲法が新しくなったように、帝国図書館も国立国会図書館に変わりました。ベアテさんと帝国図書館の関わりは、ここにあつたのです。図書館史の本には、もちろんベアテさんについて書かれたものはありません。図書館の所蔵する資料が国の政策基盤を支え、図書館の仕事・役割と図書館に夢見る思いを掴み取った、小説家としての構想の立て方に感動しました。

もう一つのベアテさんと図書館のかかわりは、藤田晴子です。『ふぉーらむ第14号』に古賀節子さんがライブラリアンとピアニストとしての甲斐美和子と藤田晴子の足跡を辿っています。藤田晴子は、レオ・シロタの高弟であり、若くしてピアニストとしても活躍しましたが、戦後、東京大学法学部女子第一期生として入学し、その後国立国会図書館の専門調査官となり、退官後憲法学を大学で教えました。ベアテさん一家ともお付き合いが続き、藤田晴子の論文集『議会制度の諸問題』には、ベアテさんの長女で法律を学び弁護士となったニコル・A・ゴードンの論文を翻訳して紹介しています。ベアテさんは、しばらく自分が日本国憲法の草案に関わったことを身近な人にも語らなかつたため、藤田晴子もベアテさんが憲法草案に関わったことを知らなかつた。「私が東大に女子学生とし

て入学できたのも、男女平等を憲法に書いたベアテさんのおかげですね」と後日エピソードもあります。

1990年代から、ベアテさんは、日本各地200か所以上で講演活動を行いました。公演を聞いた人達は、あらためて日本国憲法を学び、平和の大切さと女性の権利を学びました。その記録が綴られ、アーカイブとなります。ある女性のグループは、ベアテさんの日本国憲法への貢献と学びを「ベアテさんからの贈り物」と名付けました。

日本国憲法策定のプロセスについての膨大な資料が、日米ともに保存されており、時代が進むにつれて多くの研究が蓄積されてきています。しかし、日本国憲法に男女平等の思い込めたベアテ・シロタ・ゴードンの足跡の研究は、これからです。Mills Collegeは、憲法についての英文の資料などベアテ・シロタ・ゴードンアーカイブ所蔵リストをWeb公開しました。また今後、NWEHCのアーカイブは、(公)図書館振興財団の助成によりデジタル化することになっていきます。日米両国にあるアーカイブを活用した、今後の研究進展や学びの展開を期待しています。

ヘアテ・シロタ・ゴードン

(Beate Sirota Gordon 1923-2012)

■参考文献

中島京子『夢見る帝国の図書館』文藝春秋社
2019年

ヘアテ・シロタ・ゴードン『1945年のクリ
スマスー日本国憲法に「男女平等」を書いた
女性の自伝』柏書房 1995年

藤田晴子『議会制度の諸問題』立花書房
1985年

(独)国立女性教育会館 女性アーカイブセン
ター

[https://www.nwec.jp/facility/archivcenter.
html](https://www.nwec.jp/facility/archivcenter.html)

Mills College Beate Sirota Gordon Papers
[https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/
c8w66sgq/](https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8w66sgq/)

Beate Sirota Gordon: The Only Woman in
the Room

[https://exene.mills.edu/exhibits/exhibits/
show/beate_sirota_gordon](https://exene.mills.edu/exhibits/exhibits/show/beate_sirota_gordon)

敗戦直後の公文書焼却命令書

小川 千代子（国際資料研究所）

公文書館関係者の間では、しばしば1945年8月20日前後、全国の役所で公文書を焼却処分したという言い伝えが聞かれる。20世紀末のころから、この言い伝えを裏付ける、公文書の焼却を命じる文書が各地で少しずつ発見されるようになった。管見の限り、最初にその存在が明らかにされたのは、長野県松本市文書館が所蔵する旧役場文書の綴りの中に含まれていた一枚の公文書だ（写真）。

『松本市文書館だより』第7号（平成12年9月12日付）7頁掲載の小松芳郎「公文書の廃棄」をもとに、この資料の本文を読み下してみよう。

総兵甲号外

昭和二十年八月十八日付

県松筑地方事務所長

各町村長殿

機密重要書類焼却の件

各種機密書類、物動関係書類、其の他国力判

定の基となる如き数字ある文書（統計印刷物等）並びに之等台帳等は此の際速やかに焼却し、特に保存あるものは所轄官庁に打合せの上隠徳する等適宜の措置を講ぜられ度、尚、本件に関し貴管内中等学校、国民学校等にも適宜の方法により周知せしめたと共に、本文書は前記書類と共に焼却相成度

【文書の内容と印刷方式】右の読下しの冒頭にもあるように、この文書は今日の文書と異なり、手書き文字の謄写版印刷なのは、時代の違いだろう。冒頭にあるとおり、長野県松筑地方事務所から東筑摩郡今井村に送付された1945年8月18日付号外文書である。その内容は「統計印刷物など国力を表すようなものやその台帳類は急いで焼き捨てること、それでも保存の必要なものは隠しておくなどすること、管内の小中学校にもその旨知らせ、この文書そのものはほかの焼却書類と一緒に焼き捨てるこ

と」と読める。

だが、この文書に見えるのは印刷された文字だけではない。赤、青、朱のスタンプや赤インクの書込みが見える。

「スタンプ」たとえば、青スタンプ。この文書の右端中央にある楕円のものだ。赤スタンプは文書の右肩に「秘」「親展」「至急」の三種類が見える。その意味は何だろう。

まず、青いスタンプを見よう。これは文書の受領印である。目を凝らしてみていくと、スタンプの文字から長野県東筑摩郡今井村役場に昭和20年8月20日に届いたこと、役場ではこの文書を受取り、黒インクの手書きで第3474号という番号を記入し、正式に役場が受取ったことを記録する手続きをとったことが読み取れる。

次に文書の右肩に押された3つの赤いスタンプに着目したい。右肩の3つの赤いスタンプは、松筑地方事務所で押されたものと考えられる。その意味は、この文書は「秘」で親展、至急扱いとされたと推測される。

さらに、朱色のスタンプも見ておこう。青いスタンプの下には朱肉で右から左に「村長」「助役」「係」のスタンプと、助役の下に「村上」の押印がある。今井村役場の村上助役がこの文書の内容を把握したことを示す記録である。朱色のハンコとしてもう一点重

要なものがある。「松筑地方事務所長」の下には正方形の印が押されている。これも、推測を交えて読むと「長野県松筑地方事務所長之印」に見える。これは公印である。

実は、写真ではわかりにくいですが、この文書用の紙は反故紙の裏紙、謄写版印刷のインクはかすれがち、権威を示すはずの公印はすり減っている。それでも、発信者名に公印があるので、この文書は確かに公文書である。

【赤インク書込み】では、受取った今井村役場側ではこの文書をどう扱ったか。赤インクで記された傍線や書き込みがその記録である。文中ほどこに3か所、赤インクで傍線が施され、下の欄外には同じ赤インクで「この範囲一応協議要」、左の欄外には「学校通報方 学務係にて」と書き込まれている。書込みは、村役場がこの文書を受け取って、何をどう対応するかが端的に記入されているようだ。なお、後ろから4行目「隠徳」の2文字には赤インクで×印が付されている。今井村役場ではこの当て字を読みあぐねたのだろうか。

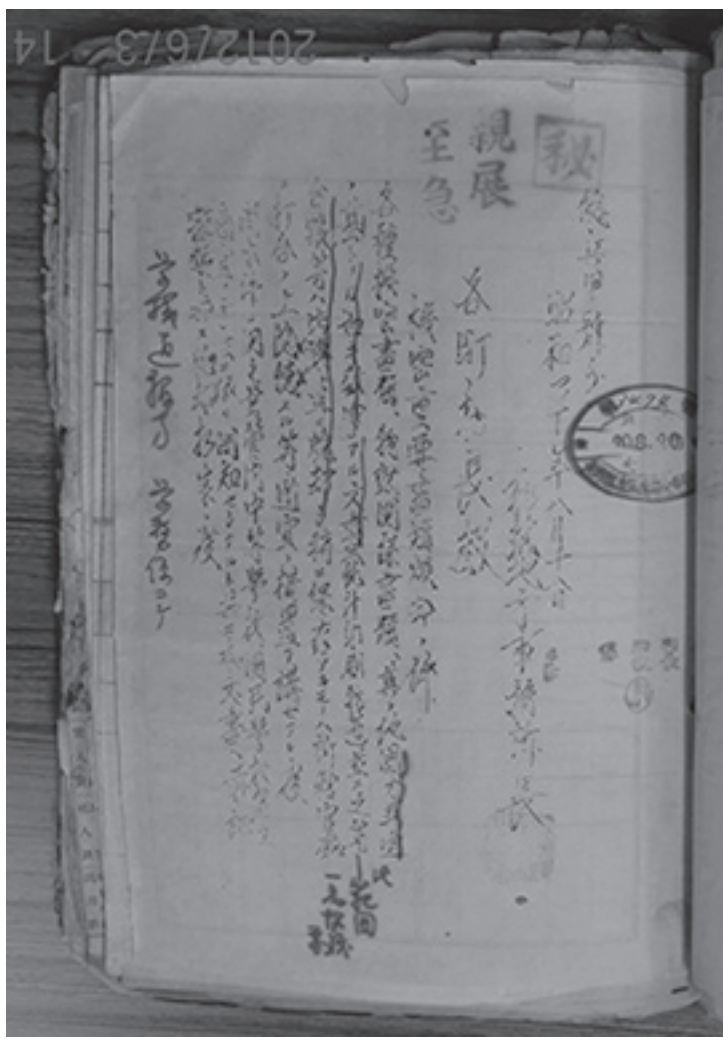
日ごろ何気なく見過ごしがちな、文書類に押されたスタンプやハンコ、書込み等々には、実は沢山の情報がある。文書類に押されたスタンプやハンコとは、その文書の位置づけ、重要度、取扱い方法等、いわば記録管理の情報源であることに改めて気づかされる。書込みもしかり。

かつて文書が現用だった時の人々の動きは、スタンプやハンコ、書込みなどで、印刷文字以上に生き生きと描き出されると思う。

「この文書はなぜ現存するのか」最後に、筆者はこの資料の末尾に記された「本文書は前記書類とともに焼却相成度」の文言に注目せずにはいられない。というのも、この文書も焼却対象の他の文書ともども、「焼却相成りたし」と

されている。しかし、この文書は21世紀の今、松本市文書館で旧役場文書の一つとして保存されている。つまり、この公文書焼却命令書は、その書面に記された命令どおり焼却されてはいなかった。それだからこそ、今日に伝わっている。

この文書が残っているという事実が今日の私たちに伝えようとしているメッセージはなにか。これを考えると、74年前の今井村役場の担当者の人となり新たな興味がわいてくる。



2019春・東北の旅

門倉 百合子

今年の3・11夜の会話。夫「連休には東北へ行こう。どっか行きたいところある？」私「飯館村の山津見神社と、名取市図書館」。すると元鉄道少年の夫は、早速旅程を作成。「初日は品川から白河までJR在来線を乗り継いで行く。そこからレンタカーで飯館をめぐり福島駅で返す。次は阿武隈急行に乗り、仙台に泊まる。翌日は名取市図書館へ行ってから常磐線で海沿いに南下して品川へ帰る。途中代行バスを使う」。私は途中の須賀川と小高へ寄ることを提案し、いろいろ情報収集に励みました。

■須賀川市民交流センター t e t t e
さて出発日の5月3日朝6時半に品川発、上野東京ライン（東北本線）で宇都宮へ。乗り換えて那須塩原。今度は新幹線で一駅の新白河着。駅前のトヨタレンタカーでアクアという小型のハイブリッド車を借り、国道4号線を40分ほど須賀川到着。

今年の1月11日にオープンした須賀川市民交

流センターは、東日本大震災で被災した総合福祉センターを再建し、市民交流、子育て支援、そして創造的復興を目指して作られた施設です。老若男女が集う中、まずは5階の「円谷英二ミュージアム」へ。須賀川出身の映画監督円谷英二の偉業を顕彰する博物館には、展示と共に沢山の本がトピックごとに配架されています。4階と3階は公共図書館で、開放的なスペースに書架と閲覧席が設けてあります。2階の子育て支援センターには子どもライブラリーもあり、1階にも書架があつて、建物全体に図書館が広がっているのが実感できました。t e t t eのウェブサイトには、開館前から情報を随時公開し、愛称も公募して市民の中にコンセプトを共有していった状況が書かれています。この施設がどのように活かされていくのか楽しみです。

■いいいて村の道の駅 までい館

須賀川を発って船引でランチ休憩後、飯館

村を目指しました。3・11後に全村避難を強いられた飯館村のことは、寺島英弥著『東日本大震災 希望の種をまく人びと』（明石書店、2013）で知りました。河北新報編集委員の寺島さんはSNSで随時発信しておられるので、2013年に知り合ってから飯館村の状況をしらば読むことができました。避難指示解除準備区域の指定は2017年3月31日に解除され、その年8月12日には「いいいて村の道の駅までい館」がオープンしています。「までい」とは相馬地方の方言で、手間暇かけて、丁寧に、大切に、という意味だそうです。寺島さんの本を読むと、飯館村の人々がいかに「までい」な生活を作り上げてきたかがよくわかりました。さていよいよ、までい館到着。広々とした敷地に横長平屋建ての建物があり、天井の高い「までいホール」を中心に、軽食コーナー、直売コーナー、特産品コーナーなどが設置され、人々で賑わっています。コンビニのセブンイレブンも入っていて、地域の方々や旅行者の利便性が図られています。特産品など調達して、までい館を後にしました。

■山津見神社のオオカミの天井絵

来た道を少し戻ってから北へ進み、山の中をめぐる山津見神社着。虎捕山（とらとりやま）の中腹にあるこの神社は1051年創建、山の神の使いであるオオカミを尊んでいます。3・

11では無事だったものの、2013年の火災で社殿が焼失し、240枚に及ぶオオカミが描かれた天井絵も失われました。その絵の復元に東京藝術大学の学生たちが取り組み、2016年に全242枚が奉納されたのです。この顛末も寺島さんの記事で読んで以来、いつかその天井絵を見たいものだと思いつけていました。

参道を昇って社殿に参拝。真新しい社殿の天井を見上げると、生き生きと描かれたオオカミのオオカミたちがいました。ゆつくりと絵を見つめ、信仰の深さ、ここに至るまでのたくさんの人々の努力に思いを馳せました。次に社務所をのぞくと、福島県立美術館で2016年に開催された「復元天井絵」展の図録が置いてありました。そこには242枚全ての絵が掲載され、手分けして描いた20名ほどの学生たちの名前も記されていました。彼らは藝大保存修復日本画研究室の所属だそうで、中国や韓国からの留学生の名前もありました。丁寧かつ力強い取り組みに深く感動。

再びレンタカーに乗り込み、山を一気に下って1時間ほどで福島市着5時。今度は阿武隈急行線で阿武隈川沿いに仙台へ向かいます。途中の富野駅で電車待ちの間に夕焼けを楽しみ、実り多い一日が暮れました。

■名取市図書館

翌5月4日は仙台駅7時半の電車で4駅目の

名取で降り、ゆりあげ港朝市で新鮮な海鮮丼をいただいてから図書館へ。3・11で建物に甚大な被害を被った名取市図書館は、代替の建物でサービスを行っていましたが、昨2018年12月に駅前の新館がオープンしました。館長のSさんとは2013年12月に知り合ってから親しくしていたので、楽しみな訪問となりました。まずは3階へ行き、ゆつたりした書架の奥にある「名取の宝ばこ」と名付けられた情報発信コーナーへ。そこには郷土資料や震災関連の資料がいくつもの書架にたくさん配架されていました。連休中ですがどのコーナーにも利用者の姿がありました。写真を撮りたいとカウンターに申し出たら、2013年9月に知り合ったKさんがいらして、しばし会話が弾みました。2階に降りてSさんと再会、ここまでの工程は大変でしたでしょうと声をかけると、「まだまだこれからです」とのお返事。お元気そうな笑顔にこちらがエネルギーをいただきました。短時間でしたがぬくもりのある図書館の空気をたっぷり味わうことができました。

■小高にあるK A O N C O F F E E (香音珈琲)

常磐線で次の目的地小高へ。避難指示が2016年に解除された福島県南相馬市小高区には、作家の柳美里さんが2018年に開店した書店フルハウスがあります。連休中は休みだったので新聞でみつけた喫茶店を目指し

た。そこは帰還した夫婦がオープンしたばかりの店です。12時前に小高着、コーヒー店まで歩き始めました。市街地を抜けるのとどかな田園風景が広がり、鶯をはじめ小鳥や虫の鳴声のほかも聞こえます。通った自動車はほんの数台。タンポポの綿帽子、紋白蝶、小川の流れるのを楽しみながら50分ほどで、コーヒーカップが描かれた建物が見えてきました。

ハムチーストースト、ジャムトースト、自家製ミネストローネ、食後にコーヒーを美味しくいただきました。店内には若い方、年配の方、数組のお客さんが入れ替わり立ち替わり。ジャズが気持ちよく響く店内から外の景色を眺め、オーナーご夫婦と会話ははずみ、ゆつたり過ごしました。同じ道を駅まで戻り、心地よい疲労感。

■常磐線を品川まで

小高発4時過ぎの常磐線に乗車、2駅先の浪江で代行バスに乗り換え。「帰還困難区域を通るので窓は開けないで下さい」「イノシシなど野生動物が飛び出すことがあるので、急ブレーキにご注意ください」とアナウンス。ほぼ満席のバスは静かに出発、車内もほとんど話し声は聞こえず。国道沿いには草木が生い茂り民家はほとんど見えず、ガソリンスタンドや飲食店はいくつも連なるが、すべて無人。そのうち海側の木々の向こうにクレーンなどちらほら見えてく

ると、シャッターの音がしばし沈黙を破る。作業用の自動車と何台かすれ違い、30分ほどで富岡駅到着。不通区間の常磐線の工事が進んでいるのがうかがえ、代行バスはあと1年くらいで解消されるらしい。

富岡からいわきまで普通電車、いわきで夕食後7時過ぎの特急ひたちに乗る、10時前に品川着。無事一泊二日の旅を終えました。車窓から、また歩きながら見た田園風景の中には、丁度田植えが終わったばかりの水田も確かにありましたが、ほとんどは休耕田であったのが、深く心に残りました。いろいろなことを感じ、考えた二日間でした。

(本稿は「Kadoさんのブログ」掲載の文章を編集したものです。)

文系？理系？

山崎 久道

教えられたし、たぶんこちらの考え方で理系の方々の参考になった部分もあったようだ。

シンクタンクに入って最初に参加したプロジェクトでの話である。先輩に工学が専門の人がいた。テーマは、石油による海洋汚染の問題であった。タンカーの事故で、石油が流出するの大きな汚染原因であった。そこで、関係する役所を訪ねて、苦心の末、日本近海の主要なタンカー事故の事例の情報を聴き取ってきた。私としては、これで研究が大きく進むと思った。ところがくぐだんの先輩はこう言った。「確かに良い事例のデータだけど、これだけでは今後起こる事故の推計はできない。航海回数や航続距離あたりの事故率のデータがあればいいのだけ」と

その時の私の発想からは抜け落ちていた考え方であった。こうしたことは、その後たびたびあった。もちろん、私の発想が理系、工学系の人たちを啓発したこともあった。ずいぶん長い間、情報工学の技術者、研究者、SEと仕事をしたが、私の考え方には、彼ら彼女らの思考回路を逸脱するものも多かったらしく、結構、メンバーとして重宝された。ある時は、私がヘッドになってその人たちを動かしたことさえあったのだ。

【大学で】

ともよくある。しかし、「文系か、理系か」という区別は、それほど本質的で、決定的なものなのであろうか。

【シンクタンクで】

私のごく個人的な経験から、感じたままを記してみた。私は、大学では、「経済学」を専攻した。経済学は文系の学問に分類されるが、とくにその当時「近代経済学」と呼ばれた分野では、数学を多用していて、コンピュータの導入も盛んであり、文系といっても理系的要素がかなりあった。

その後、シンクタンクに移って、当初はエコノミストの端くれとして仕事をして、その後資料部門に移った。四半世紀を超えるシンクタンカーとしての職業生活の中で、機械工学、原子力、環境問題などを専門とする理系の人達との交流が、最も印象的であった。その際、文系の人間には思いもつかない発想を理系の人々から

【進路としての文系・理系】

大学入試センター試験が、2020年度から衣替えして「大学入学共通テスト」になるそうである。新聞紙上では、英語の民間試験の採用をめぐる、いろいろな動きやそれに対する意見が出ている。大学入試において、英語（外国語）は、文系、理系のいずれかを問わず重要視されている。しかし、特に私立大学においては、文系では数学が省かれることもあり、理系では国語が不要との措置もある。

諸外国の事情には不案内であるが、わが国では、進路を考える時、「文系か、理系か」ということが、相当な重要性をもっているようだ。それどころか、幼少のうちから、「うちの子は算数（数学）が得意だから理系に進ませよう」などと、親が考えているという話も聞く。就職先ランキングも文系、理系別になっていることが多い。「理系に人気の会社」とか「今年は文系学生の就職が好調だ」などと、報道されるこ

その後、宮城県の県立大学に移ったが、ここでは、情報工学分野の教員との関わりが中心だった。次いで、中央大学文学部に籍を移した。ここでは、文学、歴史、哲学のいわゆる「文学部御三家」の教員の方々と、密に交流することになり、この分野の博士論文などについての説明も受けた。まさに、文系の総本山に乗り込んだ形だった。

ここでは、文学部の先生たちが、「人間」というものに大変興味を持っていることに気づいた。それも、文章、作品、歴史、思考、倫理など人間の精神生活の各側面にある。でも、ここではたと思い当たった。人間に興味を持つのは、文系人間の専売特許ではない。たとえば、人間の思考の研究の究極にあると思われる哲学においては、デカルト、パスカルやバートランド・ラッセルなど、数学者としても著名で、かつ哲学者としても超一流の人物がいる。デカルトはともかく、ラッセルなど、意外と感傷的のように私には思える。

【文系か、理系かの先に】

とにかく、文系、理系のどちらも、人間に関心を持って、それをいろいろな方向から解き明かそうとしていることには違いない。そのとき、理系は、人間の合理的側面に信頼を置いて考えるのではないか。これに対して、文系は、人間

の非合理的側面を暴き出すことに生き甲斐を感じるのだ。

私自身は「ぬえ」のようである。時によって、人間は合理的行動を繰り返すという意見になるほどと思い、別の時は、人間とは何と不合理な思考や行為をするのかと嘆じる人に同感する。私の専攻としてきた経済学は、人間は経済合理的な行動をするということを前提条件にしている。たとえば、商品の価格が下がれば、買おうとするし（需要が高まる）、逆に価格が上がれば、買うのを控えようとする（需要が減退する）。ところが、そうでないことも起こりうる。好きなアーティストのライブのチケットは、どんなに価格が高騰しても、手に入れようとする。そこで、こうした合理的動機だけでは説明できない人間行動を説明するための経済学も出現している。

いずれにしても、人生のはじめから、文献か理系かを截然と分けるのは、余りよいこととは思えない。文系の私が、大学の教養課程で最も興味を持った授業は、小野周先生による「物理学」であった。50年以上経った今でも、「光は粒子か、波か」という命題、波動は統計現象だ、などという問題設定は、よく覚えている。シュレディンガーの方程式なども、その革新的意義を、初めて教えていただいた。

また、音楽を趣味にして下手なピアノを操る

私は、フルート、リコーダー、バイオリン、チェロなど、さまざまな楽器のアマチュアと合奏したが、合奏仲間の大半が理系の人々であった。音楽と理系のつながりについては、よくわからない。音楽には、数学的要素があるから理系にとつて親近感があるという意見もある。たしかにビタグラス音律などの話は、どう考えても数学分野の事象である。でも、音楽を個人的に楽しむのに、理系も文系も関係ない。

私が、自らの経験から得たことは、「交流」こそ最も大事だということである。文系にしても、理系にしても、自分の分野や考え方で凝り固まったり、同じような専門の人とのみ付き合ったりするのではなく、できるだけ異分野の人と交流することである。実は、図書館や情報の世界の人は、昔から「異業種交流」が得意の人が多く。その意味で、世の中を広く眺め、現代の技術動向を俯瞰的に見る事ができる。こうした長所を活かして行けば、これからの時代に十分即応して行けるであろう。

継承のためのMLAとその困難

—「モリス・レスモアとふしぎな空とぶ本」と「ゆずり葉」の詩から思うこと

水谷 長志

今年2019年の春、4月16日（日本時間）の朝のテレビ報道からパリのノートルダム大聖堂の火災をほぼリアルタイムでその現場映像に接したとき、令和改元の高揚感もさつとそのひと時であれ引いたことを、そして多くの人々は、あの2001年9.11のNYの惨劇を、そして、東日本大震災2011年3.11の生々しい津波の濁流になにもかも飲まれていった光景を思い出したことだろう。

この日、先週から始まった春学期講義の火曜3限は、図書館概論のだが、講義概要の説明の先週のコマに続いて、この日の2回目のコマは、大概、MLA (museum, library, archive) の使命としての文化の「継承」とその困難さを話す予定であった。朝のパリからの報道動画は、まさに「継承」の困難さを、教壇に立つ私にも、学生にも衝撃的に直面させるものであった（図1）。



(図1)

このパリからの動画像とともに観て、その数分の後に話す「継承」についての素材は、毎年、ほかの大学の出講先でも必ず取り上げるものであり、偶然にも東日本大震災と同じ2011年に創作された短編アニメーション、The Fantastic Flying Books of Mr. Morris Lessmore があり（図2）、「ゆずり葉」の詩なのである。



(図2)

前者は、Youtube にアップされているので、容易に閲覧可能な、15分ほどのアニメーションである。2012年の第84回アカデミー賞短編アニメーション部門の大賞に選ばれた作品である。

先に書いたように東日本大震災と同年に偶然であれ、重なるように誕生したこの作品は、冒頭、まさに日本の東北を襲った地震と津波のような嵐に見舞われた主人公、レスモア氏が、すべてを失い、呆然として彷徨うところから物語は始まる。そこに空飛ぶ本に導かれて昇天する

少女から一冊の青い表紙の本が、レスモア氏に舞い降り、そして、贈られる(図3)。



(図3)

「人生は一冊の書物に似ている」(ジャン・パウル)や「誰でも面白い一冊の本が書ける、それは自分の一生だ」(サマセット・モーム)の言葉の通り、人の一生を一冊の本に^{ほんぞら}進えることは、多いだろう。

昇天する少女の人生が青い一冊の本となってレスモア氏に贈られたように、アニメーションの終盤、年離れたレスモア氏が少女と同じように空飛ぶ本に連れられて天国へ向かうその途中で、彼の人生もまた赤い表紙の一冊の本に進えられて(図4)、新たな一人の少女に贈られるのである(図5)。



(図4)



(図5)

人の一生と一冊の本の進えは、「本の贈り」という映像によって、人生から人生への「継承」として表象されてゆく。

拙い私の解説よりも、Youtubeで実見されることを何よりもお薦めしたい。

図書館概論の第二講で披露するレスモア氏のこの話のアニメーションに、人から人へ、時代から時代へと伝えられていくという「継承」のメタファーとしての空飛ぶ本の様子に、多くの学生もまた共感しているように見て取れる。

次に「継承」に関わって紹介する詩は、実は、学習院大学のアーカイブズ学専攻の大学院で、「継承をめぐる」と題して課した自由作文の成果として、私自身が教えられたものなのである。

その受講生はアーキビストを目指して、学習院の大学院の修士課程に在籍を始めたKM子さんと、別府大学で図書館学も修めたM1生で、小学校の国語の教科書で教わったという詩人河合醉茗(1874-1965)の詩**

年ごとに

ゆずりゆずりて譲り葉の

ゆずりし後にまた新しく

から導かれた想いを、「ゆずり葉の歌によせて」と題して、左のように自らのアーカイブへの希

望を綴ってくれた。

ユズリハの木はその名の如く、春に若葉が芽生えたと前年の葉がそれに譲るように落葉するという。当時まだ子どもで、今見える世界しか認知していなかった私にとって、それらがすべて過去から譲られた存在であるという事実は大変衝撃的なことであった。

今この詩を引き合いに出した理由は、河合がユズリハという植物を通して訴えたかったこと、それこそ継承の大切さ、断絶への警告と考えるからである。

われわれが暮らす社会は、過去において蓄積された人類の知的資源の上に成り立っている。それはいくつもの世代を越えて譲渡されたものであり、先人たちの継承の証である。われわれに百年後千年後へ記録を伝える責務があるとすれば、その生ずる所以はまさに今、百年前千年前の記録を使わせてもらっているところによるのではないだろうか。過去を検証し、未来に役立てること。人間の活動の根幹である。その中点に立つ者として双方向に敬意を表し、次に譲られるべき時代に対し奉仕していきたい。

私はこの文章に、大袈裟ではなく、衝撃的な感動を抱いたことを、いまでも思います。まこ

とに、「ゆずりゆずられて」の「継承」こそが、MLAの存立の根源にある意義であることを、あらためてこの院生の短い課題レポートの一篇に教えられたのである。

このような「モリス・レスモアとふしぎな空とぶ本」と「ゆずり葉」という、アニメーションと詩から始まる本務校での図書館学概論であるが、「レスモア氏」のアニメや「ゆずり葉」の詩に拮抗するだけの内容には、とてもとても到達してはいないことを恥じつつも、あらためて図書と図書館のことを伝えることの意味と、そして、MLAにおける「継承」の難しさを、前にも増して、噛みしめる毎日が続いている。

追記：

図書館学を教える教員となつての2年目のこの春学期は、まさにノートルダムの炎の衝撃の映像から始まったのであるが、そのせいであるとはけっして思っていないが、私の手許には、図書館の破壊と消滅、あるいは戦争と図書や図書館に関わる本が、わずか三カ月ほどの間であらたに5冊も集まったというのは、さてこれは、どういうことなのだろうか？

それらは…刊行日付の降順…

『ナチ 本の略奪』リデル 国書刊行会 2019.7.16

『書物の破壊の世界史 シュメールの粘土板からデジタル時代まで』バエス 紀伊國屋書店 2019.3.22

『ナチスから図書館を守った人たち 囚われの司書、詩人、学者の闘い』フィッシュマン 原書房 2019.2.28

『アウシュヴィッツの図書館係』イトウルベ集英社 2016.7.10

『戦地の図書館 海を越えた一億四千万冊』グプティル・マニング 東京創元社 2016.5.31

ベルギーのルーヴァン大学図書館は、二度の大戦において二度とも焼かれた図書館として『図書館炎上』（法政大学出版会 1992.10.1）の書に記録されたのであるが、さらには、同じような惨禍が図書館と図書に及ばないことをあらためて、切に願いたい。

* <https://www.youtube.com/watch?v=Ad3CMr3hOs>

** 長編詩「ゆずり葉」は『紫羅欄花』東北書院（1932年）に初出

<https://www.aozora.gr.jp/cards/001861/cards57431.html>

編集後記

「ふおーらむ」16号をお送りします。

毎年この時期は災害話ばかりになっていますが、関東甲信越・東北を縦断した台風19号による記録的大雨で水害・大規模停電など、被害が続いています。

両親が住む市原市の実家も、9月初めに千葉県で猛威を振るった台風15号の際は被害が無かったのですが、今回は耐えきれず、一帯が丸1日停電となったそうです。

同じ千葉県でも私が住んでいる北西部はほぼ被害がなかったのと比べると、房総南部や外房エリアは被害の程度が全く違い、壊滅的な状況です。

翻って図書館界に目を向けると、全容が掴めていないのかNDLや県立長野を除くと、各地の被災状況の情報がまだあまり出ていないようです。3.11震災の教訓も薄れてきているのかもしれませんが、ぜひSNSや「saveMLAK」などで情報共有してもらえれば幸いです。(岩本)

8月下旬に古賀節子先生からメールを頂いた。「残暑ではなく酷暑お見舞い申し上げます。凄い暑さですね。いつまで続くのか、心から秋の到来を待っています。ご存じかもしれませんが、岩波の「図書」8月号に松岡享子さんが『公共図書館という存在－映画「ニューヨーク公共図書館」を観て』と題して書いておられますが、その中にこの巨大な公共図書館がNPO法人で運営されていることが、日本の一般の人にとっては、一番の驚きではないか。。。私自身私立の子ども図書館を設立し、毎年薄氷を踏む思いで45年間活動が続ける事が出来た(税金を使わずに長年、図書館を運営してきた功績で「図書館サポートフォーラム賞を受賞したこともある。)」と書いておいでになります。フォーラム賞について、ふれて下さったので嬉しく想いました。」

古賀先生、松岡享子様からの夏の終わりを告げるエールでした。(森本)

ふおーらむ 第16号

2019年10月15日発行

発行人 山崎久道
製作 森本浩介／岩本謙一／尾崎みやま／赤田麻衣子
発行所 図書館サポートフォーラム
〒140-0013 東京都品川区南大井 6-16-16
日外アソシエーツ(株)内
TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845
http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html

